

問答文における主語のあらわれ方

小 口 叔 枝

1. はじめに

デトロイトの日本人学校で中二の生徒に国語を指導していた時、「市役所でやってくれる？」という私の問いに対して、在米 10 年になる生徒が「市役所で人々がやってくれる。」と答えた。

又、帰国後のある時、アメリカ人の留学生に「自転車で来たんですか。」と尋ねたところ、「隣人が貸してくれたので、私は自転車で来ました。」と返事が返ってきた。「大げさな言い方だな。」と瞬間思ったが、それは、「隣人」ということばのせいではなく、「私は自転車で来ました。」というところにあると気付いた。つまり、いずれの例においても、問いには主語が省略されているのに、答えには省略されずに表現されているということである。

すなわち、もともと表現されるべきことばが省略されると、意味がわからなくなって、会話が成り立たなくなることはすぐわかるが、省略するのが普通だと思われるところが、省略されずに表わされると、やはり会話が非常に不自然になるということである。

又、ある時、問い手の問いに相手を指す名前や人称代名詞が使われていると、答えにも主語があらわれ、問いに相手の名前等が使われていない時は、答えのほうにも主語があらわれていないことに気づいた。

以上のようなことから、問答における主語の省略と、自然さの規則について考察してみることにした。

ところで、日本語の一般的な省略については、三上章(1970)や久野暉(1979)等によって研究されているが、問答における主語の省略については、まだ不十分だと言える。

たとえば、三上は、「省略の一般的な総則」として、次の5つをあげている。

1. 主題“何々ハ”は次の文まで勢力を及ぼすから、第2文以下が略題になることがある。
2. ある文で注意の焦点にあった名詞は自然に次の文の主題に成上ることがある。その名詞は何格であってもよい。
3. すぐ前に、同じ(または似た)動詞、形容詞、名詞があれば、それと同様に限定された意味になる。
4. 条件句が主題を形成することがある。一般的な道理を表わすこともある。
5. 話手と相手との眼前にあるモノは言表わさないことがよくある³⁾。

この中で、問答における主語の省略に関わるものは、3と5である。3について、三上

は、

(1a)「あなたは、きのう松本さんに会いましたか。」

(1b)「ええ、会いました。」

という例をあげているが、この規則にあわない例も日常会話には多く見られる。

(2a)「小さい時、見ましたか。」

(2b)「私たちは、よく見ましたね。」

(3b)「生き物飼うの、好きですか。」

(3c)「いや、ぼくは、あまり好きじゃないです。」

(4a)「そいで、あなたは、ご自分で、あの、どこに置いてあるんですか、飛行機は。」

(4b)「ぼくは、調布に置いてありますけどね。」

これらは、問いと答えに同じ動詞、ナ形容詞が使われているが、答えには主語があらわれている。5についても、三上は、「眼前にあるモノ(者)のうち、いつもながらなのは話手と相手である。だからよく省略される」と続けているが、「よく」とはどの程度のことを指すのか不明瞭である。

又、久野は、「…日本語では、『×ハ』で始まる質問に対する答えで、『×ハ』を省略するのが普通であることに注意されたい」と述べている²⁾。しかし、「×ハ」を省略するのが「普通である」とはどういうことか、明らかではない。また、久野(1978)³⁾は、省略は言語表現の効率という点からいえば、「省いてもわかることは省く」ということであり、その法則を探るのが文法であると述べている。しかし、自然さ、不自然さという観点は、文法とは別の問題で、しかも言語教育上させられない問題であると私は考える。

本稿では、問答文における主語のあらわれ方について、どのような規則性があるかを考察する。「主語」とは、問い文においては、その問かけられている相手がその文の述部の動作・状態主であるもの、また、答え文においては、答え手自身がその述部の主体者となっているものと限定する。主題化された「…ハ」や「…ニカギッテ」「…トシテ」「…ナンカ」等も主語としての観察の対象に含めた。

又、複数の人物の中から、特定の一人に対して質問する場合は、その人を指す標識が必要になる。その方法としては、(イ)「○○さん」と、(ロ)「○○さんは」という形がある。

しかし、(イ)の場合は、これが「よびかけ」であるのか、「ハ」の省略形であるのかという判断がむずかしいことがある。この相違についても検討する。

分析の方法としては、テレビやラジオなどのインタビューや座談会、喫茶店・街・家などでの会話など、実際にかわされた日常会話の中から、談話の流れと切りはなして一対の問答の形を収集し、そこにどのような規則があるのかを検討する。

又、今回は、答え文の方に焦点をおいている。

データのとり方としては、上記のようにして収集したものが、1) 一つの話題についての問答であること、2) 言い終ったと判断できるような標識があること、(声の調子、言い切りなど)などに注意した。

データは、問い、答えに主語があらわれるか(+), あらわれないか(-)によって、(1) ++, (2) --, (3) +/-, (4) -/+, に4分類した。

I. 問いと答えの相関関係

1. 主語が問い・答えの双方にあらわれる場合 (+/+)

1.1 例

(5a) 「子供さんを産んで捨てたことを聞いて、おかみさん、いかがですか。」(多)(イ)⁴⁾

(5b) 「私だって、びっくりしてますよ。」

(6a) 「お母さんの役なんかって、どうなんですか、テレビとかそういうもので、あたは。」(ニ)(イ)⁵⁾

(6b) 「私、やったことがありますけどね。」

1.2 「問い」について

(5a) は、共通話題を持つ人が3人以上いる中で、その中の一人に質問した場合である。他の聞き手と答え手を区別するために、「おかみさん」を使っている。

(6a) は、問い手と答え手と同じ職業を持ち、互いに自分のことを考えながら、問答をしている場合である。

1.3 「答え」について

答え手の方も、(5b)、(6b) とともに、他者と自分を区別し、比較する意識があることが読みとれる。

1.4 「ハ」の省略について

次の例を考えてみよう。

(7a) 「森本さん、〇〇の本を読んだこと、ありますか。」

(7b) 「いえ、私は、まだありません。」

(8a) 「試合の間、お母さん、何してんですか。」

(8b) 「あたし、お仏壇にお線香あげて…。」

(9a) 「大体有田さん、どういう船、希望してるの。」

(9b) 「ないですよ、わしは。」

(7a)(8a)(9a) の問い文における「森本さん」「お母さん」「有田さん」は、「よびかけ」と「ハ」の省略のどちらだろうか。答え文ではそれぞれ、「私は」「あたし」「わしは」と主語を表わしている。つまり、他者と自分を区別するために用いたと考えられる。(7a) は座談会で作家論をしていた時の問いであり、他者との比較(経験の有無を問題にしている)の意味が読みとれ、答えの方も「私は」とそれに呼応して主語を用いている。(8a) においては、息子のボクシングの試合をフィルムで見た後、問い手がその母親に、試合の間は何をしているのかを尋ねたものである。ここでは、息子と母親が比較されている。(9a) では、問い手は船会社を斡旋する職業の人で、他の大勢の船を探している人々と有田さんを比べながら、尋ねている。答え手も、他の人々を念頭において答えた、考えることができる。

このように、「ハ」のない主語を用いている問い文については、その内容が、問い手、答え手、あるいは第三者の三方に何らかの関係があるような場合、本来なら、「〇〇さんは」と「ハ」が必要であるところなのに、それが省略されているのではないかと考える。

そして、このような問いに対しては、答えの方もそれに対応して、話し手自身を表わす主語が使われるのではないだろうか。

1.5 ま と め

(+/+) の場合の主語のあらわれ方は、次の図のように説明される。

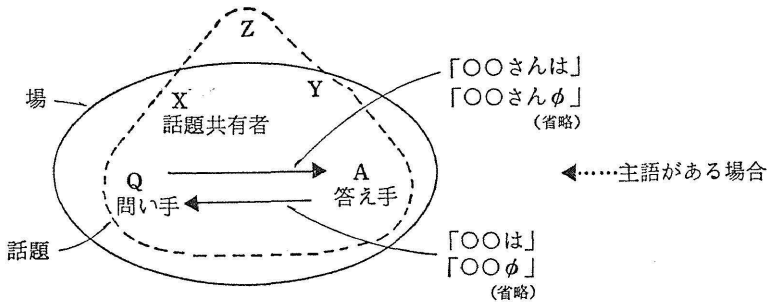


図-1

話題の共有者が、問答が行われた場に直接いても、いなくても、問答文には、比較・対照の関係から主語が必要とされる。この場合、述部は、意見・経験・状態などについて述べているものが多い。以上のことから、(+/+) の問答文の特徴は、次のようになる。

- 1) 比較・対照の意識で、双方に主語が使われる。
- 2) 主語は、複数の人が話題を共有する場合に使われる。
- 3) 問い・答えともに述部には「状態性」を表わす動詞が多く使われる。
- 4) この場合、「〇〇さん」というのは、「ハ」が省略された主語としてあらわれている。

2. 主語が問い・答えともにあらわれない場合 (-/-)

2.1 例

(10a) 「最初はわかんなかったんですか。」(多)(座)⁶⁾

(10b) 「わかんないですよ。」

(11a) 「ダブルプレーが出た時、どうです。」(ニ)(イ)

(11b) 「いっきよに惨めです。」

(12a) 「日本に帰ってらっしゃると、安心。」(ニ)(イ)

(12b) 「やっぱりね、日本人だから、日本が一番いいんじゃないですか。」

2.2 「問い」について

(10a)(11a)(12a) の例は、いずれも相手個人の気持ちや考えを聞いているのであって、他の人と比較するような内容について、質問しているわけではない。従って、わざわざ主語を名指しして聞く必要はない。又、相手の行動や状態などを自分で観察してから問う場合も、相手を指す主語は省略されるようである。

2.3 「答え」について

答え文の方も問い文に対応しており、答え手個人の事柄について答える場合、主語は用いない。

2.4 まとめ

(-/-) の場合は、次の図のように示される。

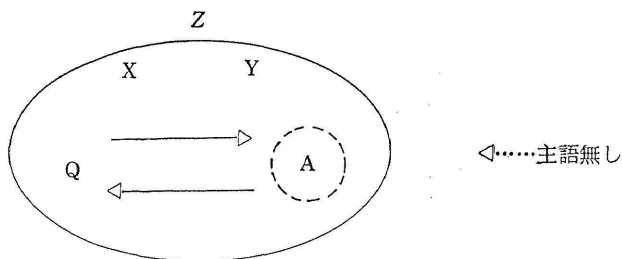


図-2

問い手が質問しているのは、相手の事柄に関するものなので、答え手も自分の事柄についてしか答えない。会話の場面の人数などには関係なく、問いと答えに主語を使う必要はない。この場合、述部には、個人の事柄を示す動詞、つまり感情・感覚・可能・経験・習慣あるいは、個人の行動を表わすような動詞類が使われる。

ところで、述部に関して、(+ / +) の問答とは違った特徴が、(- / -) の問答にはあることが観察される。(+ / +) の場合は、同じ述部の反復率は 11% と低いが、(- / -) の場合は 38% と高いのである。

(13a) 「さて、この制度で参議院、変わると 思いますか。」(多)(座)

(13b) 「いい方に変わるか、悪い方に変わるか、非常に微妙なところがあると思いますね。」

(14a) 「…どんな感じでしたか。」(ニ)(イ)

(14b) 「…とても大変だなという感じでした。」

(15a) 「…お許しにならないのですか。」(ニ)(イ)

(15b) 「許しません。」

自分の事柄に関しての問いであるから、答え手は、そのまま素直に同一述部を反復するのだらうと考えられる。この場合、違った動詞などを使って答えると、問答がちぐはぐに感じられたり、答えをそらしているように感じられる。

(16a) 「経済協力をぐんと他の国よりあげたらどうかと思いますが、そんな気は全然ないですか。」(多)(イ)

(16b) 「経済協力は、割合いっしょうけんめいやっているんですよ。」

(- / -) の問答文の特徴は、次のようになる。

- 1) 問い手は、相手の事柄について尋ね、答え手は、自分の事柄に関してだけ答える。
- 2) 問いと答えに同じ述部が反復されることが多い。
- 3) 感覚・感情など、個人的な事柄を表わす動詞か行動を表わす動詞が多くあらわれる。

3. 主語が問いにのみあらわれる場合 (+/-)

3.1 例

(17a) 「関東節と関西節の違い、ゆきえちゃん、わかる？」(ニ)(対)

(17b) 「さあ、わかりません。」

(18a) 「あんた、今日学校へ行くの。」(ニ)(イ)

(18b) 「行くよ。」

(19a) 「はずせる、あなた。」(ニ)(イ)

(19b) 「わかんない、まだやってない。」

(20a) 「性質は、まあ、大体、あなたは、素直なほう？」(ニ)(イ)

(20b) 「いや、素直でもないです。」

3.2 「問い」について

(20a) の例文は、問いに関しては (+/+) の場合と同じ条件である。答え手の方は、自分自身の性質についての判断を述べているので、主語は省略されていると判断できる。

(17a)(18a)(19a) については、「ゆきえちゃん」「あんた」「あなた」を、この場合、「よびかけ」と判断する。それは、問いにおいては相手自身の事柄についてだけ尋ねていて、他者との比較の意味が見られないからである。収集した際、「よびかけ」であると直観的に判断していたこととも一致した。

3.3 「よびかけ」について

上記の他に「よびかけ」と判断した例を次にあげる。

(21) 「あんた、うちの自動車さびてるとこ、直してくれと言ったのかよ。」(ニ)(イ)

(22) 「あんた、ドラマ見て笑ってんじゃない。」(多)(イ)

(23) 「阿部くん、なんかスポーツやってんの。」(ニ)(イ)

(24) 「雪虫って、ゆきちゃん、知ってる。」(ニ)(対)

(25) 「で、うちでは本当にまかないのおばさんなんですか、あなた。」(ニ)(イ)

(26) 「どういうおこるのがあなた、一番多かったですか。」(ニ)(イ)

(21)~(26) の例では、その問答の場の人数は、2人の場合も2人以上の場合もあるのだが、話しかける相手だけの注意を引いたり、呼んだりするのであるから、その場にいる他の人々には関係がない。確かに「よびかけ」か「ハ」の省略かは、かなり主観的なところがあって、判断しにくいのが、次の3点を判断の基準とし、それにのっとって資料を分類した。

- 1) 「○○さん」の後に、ポーズがある。
- 2) 名前を呼んだ後、その語尾が上がるか、あるいは強く下がる。
- 3) 話題が、よびかけた相手自身に関わる事柄についての場合が多い。

この方法で資料を分析していったところ、「よびかけ」と判断した問いに対しての答えには、主語無しの形が多いという事実気がついた。つまり、3) であげたように、話題が相手自身の事柄である場合、「よびかけ」が多くあらわれるということである。他の収集資料からもこのことが言える。従って、「よびかけ」か「ハ」の省略か考える一つの目安に、答えの反応を見る方法もあるのではないかと考える。(一/一) の問答例で検討した

ように、個人的な事柄について述べている場合は、答えに主語がないのが多いから、(+/-)の問答においても、この場合「〇〇さん」は主語としてあらわれているのではなく、「よびかけ」として使われたと考えることができる。

3.4 「答え」について

他者との比較・対照のない自分自身の事柄を述べる場合は、問いの中には、他者との相対的な意味が含まれていても、それには呼応しないで、主語無しで答えるようだ。

3.5 まとめ

(+/-)の場合は、次の図によって示される。

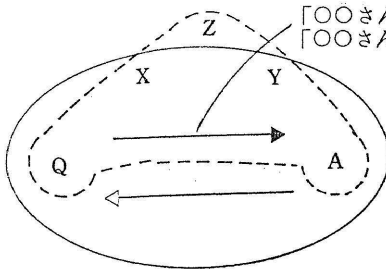


図 3-1

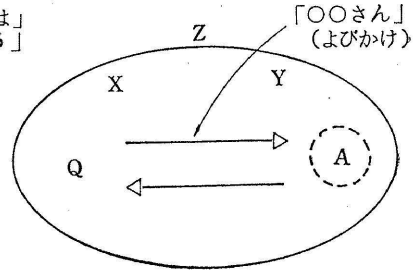


図 3-2

「よびかけ」があらわれるのは、相手自身の事柄に関して、第三者のいる場で尋ねる場合に見られる。

(+/-)の問答文の特徴は、次のようになる。

- 1) 問いに「〇〇さんは」、あるいは「〇〇さんφ」があらわれる時は、複数の人が同じ話題を共有しているため、比較・対照の意味合いが生じる場合である。
- 2) 問いに「よびかけ」があらわれる時は、話題は答え手自身の事柄についてである。この場合、答え手を表わす主語はあらわれない。
- 3) 述部は個人的な事柄を表わす場合が多い。

4. 主語が答えにのみあらわれる場合 (-/+)

4.1 例

(27a) 「なんで、そんなとこ、おいたんだよ。」(=)(イ)

(27b) 「私だって、考えたわよ。」

(28a) 「小さい時、見ましたか。」(多)(イ)

(28b) 「私たちは、よく見ましたね。」

(29a) 「たしか長期出張でいらしたんですね。」(多)(座)

(29b) 「私もその時出張でしたし、それから、所員も単身だった。」

4.2 「問い」について

(27a)(28a)(29a)の問いは、相手の事柄についてだけ質問しているので、(-/-)の場合の問いと同様、相手を指す主語はあらわれていない。

4.3 「答え」について

自分の事柄について聞かれた答え手が、他者との比較のうえで返事をしている場合、自分を明確に表わすために、主語を用いる必要がある。他者との比較のあらわれとして、「…ダッテ」「…タチ」「…モ」等にそれが読みとれる。

4.4 ま と め

(-/+)の問答関係は次の図によって示される。

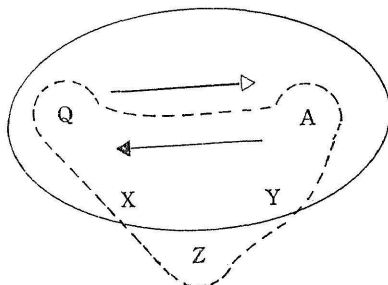


図 4

問い手が相手の事柄について聞いた時の答えに、答え手は、その話題を共有している他者と比較しながら答えたので、自分を示す主語が必要となる。この場合、「…ナンカ」「モ」「…ダッテ」「…タチ」「…ニトッテ」等が使われることが多い。

述部の反復率は18%ぐらいで、(+ / +) の場合の割合と近い。問答文の4分類別述部の反復率は、次の通りである。

(+ / +) 6/53 11%, (- / -) 87/230 38%, (+ / -) 38/103 37%, (- / +) 6/33 18%

(- / +) は、次のような特徴があげられる。

- 1) 主語のあらわれ方は、話題を共有する人数による。
- 2) 問い手は相手の事柄のみを質問しているが、答え手は、それを他者と比較しながら答えているので、自分を表わす主語が必要となる。
- 3) 答えの述部は、状態性を表わすものが多い。

5. 結 果

以上の4分類から分析した結果、答え文にあらわれる主語の有無に関しては、次のようなことが言える。

- 1) 答えようとする叙述内容が答え手だけに関わる事柄の場合、主語が省略される。
- 2) 一般的・相対的な事柄の場合、主語は必要とされる。
- 3) 述部の持つ意味特徴によって、主語のあらわれ方に相違がある。
- 4) 問いにおける「○○さんは」、答えの「私は」に対応している。この場合「ハ」は省略され得る。
- 5) (+ / -) の中では、問いにおける「○○さん」は答えの「 ϕ 」に対応している場合がある。この場合、「○○さん」は「ハ」の省略された形ではなく「よびかけ」と考えら

れる。

上記の 3) に述べたように、問答文の述部の持つ意味によって、主語のあらわれ方に相違のあることが観察されたが、次節でこの点について考察する。

II. 述部の持つ意味による主語との相関関係

収集資料 419 例の述部を、次のように分類整理した。

- 1) 行動・動作を表わす動詞
- 2) 感情・感覚を表わす動詞
- 3) 可能動詞
- 4) 状態を表わす動詞
- 5) 形容詞・ナ形容詞
- 6) 名詞+ダ

以上の 6 分類について、答え文の主語の有無を表にしてみると、〔表 1〕のようになる。

〔表 1〕 〈述部と主語の有無との関係〉

	主 語 有		主 語 無		計
1) 行動・動作	12(例)	11 %	96	89 %	108(例)
2) 感情・感覚	23	20 %	93	80 %	116
3) 可 能	0	0 %	14	100 %	14
小 計	(35)	(15)%	(203)	(85)%	(238)
4) 状 態	12	31 %	27	69 %	39
5) 形・ナ 形	23	27 %	63	73 %	86
7) 名 詞 + ダ	16	29 %	40	71 %	56
小 計	(51)	(28)%	(130)	(72)%	(181)
計	86	21 %	333	79 %	419

(%は各分類における主語の有・無の割合を示す。)

〔表 1〕から、答え文においては、

- 1) 行動・感情・可能などを表わす動詞は、主語無し文に多い。
- 2) 状態・性質などを表わす述部は、主語有り文に多い。

そこで、1)~6) の分類に分析を行った。

1. 行動・動作を表わす動詞

1.1 「主語有」の場合 (12 例)

12 例の述部は、行動・動作を表わしているにもかかわらず、問い文のくり返しになっていたり、習慣を述べたりしているので、状態的な意味が読みとれる。

1.2 「主語無」の場合 (96 例)

96 例中 45 例に反復が見られる。つまり (—/—) の分析の折見たのと同じで、問い手が相手の立場で質問しているので、答え手も同一の述語を反復するのではないかと考えられる。このような場合、行動・動作を表わす動詞が多く使われている。

2. 感情・感覚を表わす動詞

「思う」「感じる」「分かる」について、それぞれ「主語有」「主語無」の場合を分析した。

2.1 感情・感覚動詞「思う」

2.1.1 「主語有」の場合 (13 例)

過去形がないことや、「思う」「思うんです」といった話し手の判断を強調したり、相手と比較したりする場合に使われている。

2.1.2 「主語無」の場合 (39 例)

過去形が多いことや、話し手個人の過去のでき事として「思う」を使っている。

2.2 感情・感覚動詞「感じる」

2.2.1 「主語有」の場合 (3 例)

「感じる」は静的・状態性を表わすものと結びつく傾向があるから、話し手の相手との比較・対照の意識が読みとれる。

2.2.2 「主語無」の場合 (6 例)

「感じがする」が 4 例ある。これは、瞬間的におこって、消えてしまうような場合に用いられるので、4 例においても、同じように使われていると考えられる。例えば、

(30a) 「東大生って、パッと考えると、何、うかぶ。」

(30b) 「やっぱり、まじめっ子って感じしますよ。」

のように、「パッと」と短時間内での動的な心理表現ではないかと考える。

2.3 感情・感覚動詞「分かる」

2.3.1 「主語有」の場合 (なし)

観察例無し。この動詞は、可能動詞と共通の意味を持ち、他者と意識して比較しない限り、話し手自身の事柄について述べる時は、主語は不要である。

2.3.2 「主語無」の場合 (10 例)

「分かる」と判断するのは、話し手自身である。従って、普通主語は要らない。

3. 可能を表わす動詞 (14 例)

可能かどうか判断するのは、話し手自身である。従って、資料は全て、主語無の方にあらわれている。

4. 状態を表わす動詞の場合

「ある」を例にとって検討する。

4.1 「主語有」の場合 (6 例)

「ある」には、次の 3 つの意味が考えられる。①経験、②事物の存在、③所有、そして、ここにあらわれているのは、④が 4 例、②③は各 1 例である。状態性の意味の強い場合に

は、やはり主語が使われているようだ。

4.2 「主語無」の場合 (15 例)

①は6例、②は無し、③は9例である。この③の意味のうち、過去形は5例ある。「持つ」が表わす意味には、状態性と動作性があるが、この場合は、行動・動作を表わす方の意味として使われている。

5. 形容詞・ナ形容詞

5.1 「主語有」の場合 (23 例)

現在形が21例ある。発話時の状態を述べている。他者との比較もあり得るので、主語を表わす必要がある。

5.2 「主語無」の場合 (63 例)

過去形(19例)が「主語有」の場合と比べると、多くあらわれているが、主語の過去における感情体験は、他者と比べる必要はないから、主語を表わすことは不要である。

6. 名詞 + ダ

6.1 「主語有」の場合 (16 例)

一般的な事柄を述べている。従って、話者を他と区別するために、主語が必要である。

6.2 「主語無」の場合 (40 例)

「感じた」「安心だ」「苦痛だ」のように個人的な事柄を表わすものが多い。この場合、主語は不要である。

7. ま と め

以上の分析をまとめると、次のようになる。

- 1) 「主語有」について、述部は、
 - ① 状態・静的な事柄を表わす。
 - ② 一般的な事柄を表わす。
- 2) 「主語無」について、述部は、
 - ① 個人の行動・動作を表わす。
 - ② 主観的・個人的な事柄を表わす。

〔表1〕において、1) 2) 3) の述部の場合は、主語の無い方が多く、4) 5) 6) では主語のある方が多いという仮説を、正規分布を用いて統計的に検定してみた。二つのグループでの主語の有無の割合が同じであるという仮説は、5%の危険率で棄却された。二つのグループでは、主語のあらわれ方に差があると考えられることができる。

III. 結 論

以上の分析結果から、問答文において、答えに主語が表わされるのは、次の場合である。

- 1) 状態を表わす述部を持つ。
- 2) 一般的な事柄について述べている。
- 3) 相対的な意味を持つ。

一方、主語が表わされないのは、次のような場合である。

- 1) 行動・動作を表わす述部を持つ。

- 2) 個人的な事柄について述べている。
- 3) 他者との比較の意識はない。

今後の問題点として、会話文中の断片的な一対の問答文についての分析から、次は、談話の流れに関わった問答文における、主語の有無や、疑問詞の有無と主語の有無との関係等について、研究する必要があると感じた。

註

- 1) 三上 章「文法小論集」くろしお出版 1979年 p.155~p.162
- 2) 久野 暉「日本文法研究」大修館書店 1979年 p.235
- 3) 久野 暉「談話の文法」大修館書店 1978年 第一章
- 4) (多)……3人以上 (イ)……インタビュー
- 5) (二)……2人
- 6) (座)……座談会

参考文献

- 井上 和子 「文一文法から談話文法へ」『言語』大修館書店 12巻12号
 大石初太郎 『話しことば論』秀英出版 1971年
 金田一春彦 『日本語セミナー2』筑摩書房 1982年
 久野 暉 『談話の文法』大修館書店 1978年(第3版)
 久野 暉 『日本文法研究』大修館書店 1979年(第6版)
 柴谷 方良 『日本語の分析』大修館書店 1982年(第3版)
 東京外国語大学附属日本語学校編 『日本語I』凡人社 1979年
 時枝 誠記 『日本文法口語篇』岩波全書 1978年(改版)
 西尾寅弥編 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版 1975年
 日本語教育学会編 『日本語教育事典』大修館 1982年
 N H K 『訪問インタビュー』日本放送出版協会 1983年
 野田 尚史 「有題文と無題文—新聞記事の冒頭文を例として」『國語学』136
 牧野 成一 『くりかえしの文法』大修館書店 1980年
 三上 章 『文法小論集』くろしお出版 1970年
 三上 章 『三上章論文集』くろしお出版 1975年
 宮島達夫編 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版 1975年
 森田 良行 『基礎日本語1・2』角川書店 1982年(6版) 1980年